

「ラーニングライフ 第4回学生の学修に関する実態調査報告書」の結果に基づく対応について

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等	
総合科学部	1 大学教育に関して、在学中に「語学力」の獲得を期待している学生が多く、また、留学を予定している学生が多いなど、「語学力」への要望が高い。	(1) カルチャーラウンジを利用した留学生との交流、「総合科学実践プロジェクト」での海外留学などを学生に一層周知させる。	カルチャーラウンジは日本人学生と留学生で一日40名ほどの利用があり、学生の運営による外国語（英語、中国語、韓国語、スウェーデン語）講座や、種々の交流に役立っている。また「総合科学実践プロジェクト」の履修による海外経験は、語学力の獲得はもちろん、異文化体験にも大いに役立っている。また、留学に関する報告会や説明会を実施している。
		(2) 留学に関わる費用、奨学金制度などについて、「総合科学入門講座」、「SIH道場」などの授業を通じて学生に伝える。	「総合科学入門講座」には、先輩学生の留学経験を聞く機会を設けており「SIH道場」でも国際交流委員会の教員から「留学のススメ」と題して、留学を奨励する時間を設定している。「総合科学実践講義」にも留学に関連する講義がある。各々の時間の中で、留学関連の費用や奨学金について、具体的な形で学生に説明をしている。
	2 早期から「課題発見」、「解決力」に関連する授業を提供する必要がある。	(1) 今後、SIH道場にて「課題発見」、「協働力」に関連するプログラムの実施を検討する。	本年度のSIH道場の学生交流のプログラムの一つに「協働力」に関連したプログラムを導入し、また、「課題発見」については、後期開講の「課題発見ゼミナール」をこれにあてた。次年度以降も同様の対応を予定している。
		(2) 教養教育科目/専門科目において、アクティブラーニングを積極的に組み込んだ授業の展開を教員に要望する。	教授会、教務委員会を通じて、アクティブ・ラーニング、ラーニング・ポートフォリオ、反転授業などの積極的な導入について、また、次年度のシラバスに可能な限り記載するように周知した。
	3 授業以外に学修している学生が多い。	(1) 自学自習の環境を整えるために、学内施設である学生交流プラザ、コースゼミ室などの利用を促進させる。	多くの学生が、地域交流プラザ、スタジオ、各コースのゼミ室等を利用して、学部長懇談会の際には、学生から24時間利用できるスペースの要望がだされた。総務委員会等で協議していただき、セキュリティの関係で24時間自由に利用することが困難なスペースもあるが、自学自習のスペース確保することも検討する必要がある。
		(2) 担任教員、指導教員から授業以外の学修に関する情報（推薦図書、学習方法など）を提供する。	教授会、教務委員会を通じて、授業以外に学修している学生が多い現状を伝え、更にこの状況を維持する上でも、レポート等への参考図書、授業以外の学修に関する図書の推薦など学修意欲を高めるアドバイスを指導教員、担任教員から学生に行うよう協力要請した。
医学部医学科	1 カリキュラムマップ、ナンバリング、GPA、シラバスを活用していない学生が多い。	(1) 年度はじめのオリエンテーション等で、学修ガイダンスとして、カリキュラムマップ、ナンバリング、GPA、シラバスの活用方法について説明を行う。	3年生の系統別病態診断オリエンテーション、4年生の臨床実習オリエンテーションで、カリキュラムマップ、ナンバリング、GPA、シラバスの活用方法について説明を行った。2年生には医学研究実習プレ配属の中でこれらの説明を行う予定である。次年度の1年生、2年生には4月はじめのオリエンテーションの中でこれらの説明を行うように計画を進めている。
	2 学生自身による学修振り返りが不十分である。	(1) SIH道場、医学研究実習、系統別病態診断、臨床実習などにおいて、定期的に学修振り返りの機会を設けて、6年間を通してメタ学習を推進していく。	SIH道場では次年度に振り返りをテーマとしたグループワークの導入が決定している。医学研究実習では基礎系教授による中間ヒアリングを行い、振り返りを促し、次年度からは実験ノートの項目に振り返りの記載を追加するとともに、修了時に配属先分野教授による振り返りセッションを設けることを必須とし、この説明をプレ配属で実施予定である。系統別病態診断ではwebシステム、臨床実習では実習手帳およびwebシステムを活用して定期的に学修振り返りを行うことを各オリエンテーションで説明した。系統別病態診断ではメンターとのメンタリングを学修振り返りの機会としており、臨床実習においても教員との振り返りセッションを設けることを検討中である。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等	
医学部医学科	3 Moodle、Mahara、Manaba、スーパー英語などのLMS をさらに活用する必要がある。	(1) 学生や教員に具体的な活用法について提示した資料を作成するとともに、説明会の開催を企画する。	SIH道場ではMoodleとMahara、医学英語ではMoodleを活用している。また学部連携PBLチュートリアルのプロダクトやアンケート結果をMoodleを用いて共有している。他の科目ではこれらの利用は浸透しておらず、Manabaはほとんど活用されていないため、これらの具体的な利用方法についてのFDを計画する。スーパー英語はマイレージポイントに加算することで今後利用の促進を図ることとし、平成30年度オリエンテーションでの説明を予定している。
医学部医科栄養学科	1 2年時の教養教育の科目が午前中、午後専門科目があり、昼休みを使用して常三島から蔵本に異動しなければならない。	(1) 教養教育院と協議をし、1年次に、教養科目の履修を終えるカリキュラムを構築する。	教養教育院と協議し、蔵本キャンパスへ講師を派遣いただくことを検討中である。
	2 授業評価アンケートについては、約7割の学生がよく考えて回答しているとの問いに、「全くそう思う」、「そう思う」と回答している。また、約6割の学生が教員に対する学生の意見を伝える良い機会と考えている。。一方で、授業改善に活用されていると思うと回答したものは約3割である。	(1) 学生にアンケート結果をフィードバックさせる仕組みを構築する。	全学的に授業アンケート結果をフィードバックさせる仕組みが検討されているので、その大枠が決定次第、医学部全体で検討を行う。
	3 回収率が高かったので（95.1）、アンケート結果は全体を反映しているものと推察される	(1) 高い回収率を維持する。	次のアンケート結果を基に持続的に高い回収率を継続的に維持できるのか検討を行う。
医学部保健学科	1 授業時間外の学修は「宿題が出たときのみ」（50%）、「興味のある科目や分からない科目を自主的に」（35%）と答えた学生が多い。自主的に予習・復習を行っている学生の割合が、前回調査と比べて約10%高くなっている。一方で、学生自身の学修時間や学修態度に「満足しているとはいえない」学生は6割と多い。	(1) 学科では、平成25年度から、幅広い学修の促進を目的として、専門性を志向した学修方法を冊子「学修の手引」やSIH道場の教育プログラム等を通して入学時に提示し、将来像をイメージした「学修設計」の立案を指導している。これらの取り組みが自主学習の割合増加につながっていると考えられ、学修計画に沿った学修ができるよう継続的に指導と支援を行う。 (2) 意欲を高める適切な指導により自発的な学修が可能であると読み取れることから、毎回の授業の予習・復習や自学自習の指示などを具体的にシラバス等に明示する。	取り組みが自主学習の促進に良い効果を与えていると考えられることから、引き続き指導と支援を行う。  平成30年度入学生用シラバスに明示するよう教員に周知する予定である。
	2 授業時間外学修を1日平均2時間以上行っている学生は、学科全体で29%（前回28%）、看護学専攻26%（前回31%）、放射線技術科学専攻34%（前回25%）、検査技術科学専攻29%（前回20%）であり、前回調査時と同様、大学生としての必要な学習時間の確保が不十分である。	(1) 科目によってはアクティブ型授業を導入することで、自主学習を促すことに効果があると考えられ、能動的な学修の推進を図る。	アクティブ型授業の促進を図るよう教員会議等で周知を行っている。ただし、学生の総学習時間が過負担とならないよう、保健学科教務委員会で一元的に調整を実施することとしている。
	3 SIH道場を体験した学生のうち、在学中の学修に役立っていると思っているのは34%であった。このうち、看護学専攻では「他者との協働」、放射線技術科学専攻では「専門分野の体験学習」が特に役立ったと回答している。	(1) 教員の期待通りの項目が挙げられている。SIH道場については在学中だけではなく卒業後に意識される効果の検証も必要である。	SIH道場を導入した年度の卒業生に対してアンケート調査を実施する際、SIH道場による教育効果を検証する内容の項目を追加する。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
医学部保健学科	4	専門教育の内容の難易度が適切と答えた学生は、看護学専攻85%、検査技術科学専攻94%であり、全学の69%より高い傾向にある。難易度に関して、特に授業改善の必要は無いと考えられる。一方で、学生との懇談会を通して、授業内容の水準をもっと高度にすべき、易しくすべき、と答えた学生の意見もあり、学生間で受け止め方が異なっている。	(1) 学修に意欲的な学生とそうでない学生に二分する傾向がみられる。将来像を見据えた魅力的な教育プログラムを開発し、提供する。	保健学科教務委員会で状況を調査・分析し、将来像を見据えた教育プログラムを提供するための検討を行っている。
	5	高校で履修しなかった科目(数学、物理、化学、生物)のために、大学での学修に支障を感じた科目が「ある」と答えたのは、看護学専攻24%、放射線技術科学専攻18%、検査技術科学専攻73%であり、専攻間で差がみられる。看護学専攻では「化学」と「物理」、検査技術科学専攻では「物理」の学修が特に不足していると感じている。	(1) 自然科学入門の受講等を個別に勧める指導を行う。	平成30年度の入学生に対して入学時に実施する高校復習テストの成績を活用し、自然科学入門の受講等を個別に勧める指導を行うこととしている。
歯学部	1	自由記載欄には、学修環境としての歯学部の建物・設備に対する不満が多く、中には他大学と比較した厳しい意見もあった。	(1) 歯学部では、平成29年度より改修が始まり、3年の予定で建物の改装が行われる。これにより、学生の不満の対象であった、講義室・セミナー室・更衣室・トイレなども改修され、またこれまでよりも学修スペースを取ることが出来、不満の大部分は解消されるのではないかと考える。	平成29年度より、一期目の歯学部棟の改修がはじまっており徐々に施設は更新されている。
	2	シラバスの利用状況：両学科とも低い	(1) 学年始めでのオリエンテーションにおいて意識をさせ、また電子版の活用の仕方の指導を行う。歯学部では両学科ともほぼ全ての科目が必修であるため、講義を与えられるままになっている可能性があるため、自主的な学修姿勢を持たせるような指導も必要かもしれない。	歯学部では、ほぼ全ての科目が必修科目であり、さらに多くの講義で初回に予定表を配布するなど、機会をみつけてシラバスを意識させる努力をしている。今後は学年の変わり目などに電子版の活用方法を再度周知する予定である。
	3	成績評価分布の公開については、歯学部歯学科において4割弱が、口腔保健学科については2割弱の学生が知らない。GPAの確認も同様	(1) 成績評価分布の公開について、特に歯学科の学生に周知し、自分の立ち位置について認識してもらうことで、学修意欲を高める。特に歯学科の学生については、国家試験の難易度が増す中、自分の立ち位置を認識することは重要であると思われる。	歯学部では全ての科目が必修科目であり、また国家試験に向けて、学生の中では単位取得が優先されているため成績分布への意識は低いと思われる。しかしながら国家試験の難易度が上がっている中、これを意識させる必要はある。成績開示のシステム上、年度初頭に成績評価分布の公開について周知する予定である。
	4	高校での未履修科目：勉強している割合は最も高いにもかかわらず、数学・物理が理解困難。近年、自然科学入門でも不合格となる学生が出現し、要注意である。数学・物理に苦手意識を持っている	(1) 図書館のスタディサポートスペース（SSS）の活用を促す。	図書館のスタディサポートスペース（SSS）の活用を成績不良者に対して勧めている

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
歯学部	5	教科書の購入状況：「少し購入・全く購入しない」は歯学科が群を抜いている	(1) 購入しないことよりも、その背景にある、成書を通して読むという姿勢が無くなってしまっていることが問題である。このため全体像を見ないで学修するということがしばしば見られ、その改善が必要であり、成書の通読を促すことが必要であると考える。	教科書の購入の必要性に関しては、各学科目開始時に先立ち周知している。（アンケートの回答に、新規購入のみがカウントされていて、譲渡されたなどが含まれていない可能性がある）一方、多くの教官が非常に豊富な資料を用意しており、成書が参考書の位置づけになっているケースもある。
	6	大学の授業以外の学修を実施していないのが最も多い（口腔保健学科でより）	(1) 課題を設定し、講義・実習への準備をさせる。	改めて調べると、多くの科目で課題は出されており、学生はそれを授業以外の学修ととらえていない可能性が高い。
			(2) 図書館のスタディサポートスペース（SSS）の活用を促す。	図書館のスタディサポートスペース（SSS）の活用を勧めている。
	7	図書館の学修支援サービス：夜間主を除けば利用していないのが最も多い	(1) その内容について、さらなる広報活動を行う。	授業サポートナビを充実させた。
8	歯学科において専門課程の実習科目を減らすべきだという意見が、1.5割程度あった	(1) このコメントの詳細な背景が明確にするため、さらなる聞き取り等、情報を収集する。	アンケート調査の実施準備を行っている。	
		(2) 実習の重要性について、説明をする必要を感じる。	実習の重要性について、説明をした。	
薬学部	1	薬学部共通学科の回収率の改善	(1) アドバイザー懇談会等の時間をとり、アンケート回収を行う。	回収率の低い他のアンケート調査について、学年別の懇談会の時間を活用して、アンケート調査を実施した。ラーニングライフのアンケート調査においても同様の取扱いとし、回収率の改善を図る予定である。
	2	薬学科学生の大学院進学希望率の改善	(1) 平成29年6月22日開催予定の大学院説明会（学部及び大学院博士前期課程の学生対象）において、大学院で学ぶ意義等を説明し、進学希望率の増加を図る。	平成29年6月22日に大学院説明会を開催し、17名の学生が参加した。参加学生の約8割の学生から、本教育部を受験希望のアンケート結果が得られた。博士課程（4年制）において、昨年度の受験者1名を上回る受験者数となった。
			(2) 配属研究室における指導等により学生の意識向上を図る。	各研究室の指導教員から、大学院進学について説明を行った。
		(3) 職員会議で改善策について協議する。	職員会議で改善策について協議予定である。	

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
薬学部	3	eポートフォリオの積極的利用	(1) FD研修会などで積極的にe-ポートフォリオシステムの利用を教員に促す。	FD研修会等でe-ポートフォリオシステムの利用について説明予定である。
	4	薬学部におけるeラーニングコンテンツの充実	(1) FD研修会などで積極的にeラーニングコンテンツの充実と利用を教員に促す。	FD研修会等で積極的にeラーニングコンテンツの充実について説明予定である。
理工学部・工学部	1	理工学部社会基盤デザインコース／工学部建設工学科1-1 将来の希望において「民間企業に就職して活躍したい」「公務員として活躍したい」が合わせて、学科、コース、昼間、夜間で多少違うものの、約7割を占める。特に他学科と比較して公務員志望が多いことが読み取れる。社会インフラが老朽化するとともに、人口減少によってその維持管理は全国的な問題となっており、徳島大学としても質の高い技術者を一定数、社会に送り出し続けることが求められている。建設工学科では同窓会組織のサポートを受けつつキャリアプラン教育などを実施している。卒業生の就職先はほぼ土木建設分野であり、我々に課せられた責務ははたしていると言えるが、1-2 将来の希望が明確になった時期は比較的遅く、大学入学後が半数を占める。このため今後も学科同窓会組織等と連携を深めキャリア教育を実施する。	(1) 学科同窓会組織等と連携したキャリア教育を実施する（キャリアプラン演習において、学科同窓会組織から講師を招き、土木・建設分野の業務事例を紹介する等）。学科同窓会組織支援による学業優秀者の表彰制度を新設する。	キャリアプラン演習にて、学科同窓会組織美土利会から講師を派遣してもらい、土木・建設分野の業務事例を紹介いただいた。美土利会との連携による学部1～3年生対象の表彰制度を新設した。さらに、就職説明会の開催も予定している。
	2	理工学部社会基盤デザインコース／工学部建設工学科2-3 大学教育で獲得が期待できる知識、能力では「一般教養」が2割程度、「専門知識」が3割程度、「課題発見・解決力」が1割強であった。もちろん専門知識は欠かせないが、実社会における課題は常に変化しており、柔軟にその課題を解決できる能力がより必要である。「課題発見・解決力」の強化を目的として、社会基盤デザインコースでは、昨年度からSIH道場やSTEM演習を1年次に行い、3年次のプロジェクト演習を経て、4年次の卒業研究につなげるカリキュラムをスタートさせた。	(1) グループ型学習（SIH道場、STEM演習、プロジェクト演習）の充実を図る。卒業研究実施時における課題発見・解決能力の向上を図る。	STEM演習にSIH道場の要素を取り入れ、SIH道場、STEM演習がシームレスに繋がるように工夫を行った。来年度以降のプロジェクト演習の効果的な実施方法について、コース教員全員で議論し、理工学部でのコース配属制度の実施に応じて、研究室の選択までに、各教員の研究内容が学生に伝えられるようプロジェクト演習の実施方法を変更した。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
理工学部・工学部	3	理工学部応用化学システムコース／工学部化学応用工学科 3-28カリキュラムマップの公開について、カリキュラムマップに対する認知度が低い。特に専門科目で教育効果を上げる上で、4年間の講義の流れとつながりを学生が理解することも重要なので、マップの認知度を上げる必要がある。	(1) 各学年初頭のガイダンス等により、カリキュラムマップをより一層周知する。	掲示にて周知を図った。また、年度当初のガイダンスにても周知予定である。
	4	理工学部応用化学システムコース／工学部化学応用工学科 10-1～6 eラーニングについて、多くの学生がeラーニングを活用しているのは良い傾向だが、多くの学生は自宅等学外からではなく、学内のPC端末を使っているようである。eラーニングをより促進するため、学生が容易にアクセスできる端末情報を周知する。	(1) 図書館や情報センターに加えて、共通講義棟2階CALLでもPCが利用可能である。講義の前後に学生がアクセスしやすい場所でもあり、PC利用について広く案内する。	掲示にて周知を図った。また、年度当初のガイダンスにても周知予定である。
	5	理工学部電気電子システムコース 1-1 将来の希望について、民間企業への就職が多いのは共通だが、工学部電気電子工学科と比べると、教育研究施設、国際分野での活躍を挙げる学生が若干多い。一方で1-2で将来の希望がまだ明確になっていないのが昼間で44%である。一方で1-3の大学院進学希望者は昼で63%とかなり多い。将来の希望が明確になっていないが、大学院進学を希望する昼間の学生が25%であり、大学院も含めて在学中に時間をかけて、将来を考えようとする意図もうかがえる。  工学部電気電子工学科 1-1 将来の希望について、他の工学系学科と同様、将来の希望については民間企業の希望者が多い。将来の希望がまだ明確になっていない学生が昼夜合わせて31%と回答の中では最も多い。ただし明確になった時期について、学年進行とともに大学1・2年次、3・4年次と増加している。自身の意識の向上とともに、キャリア関連科目が一助となっていること期待する。	(1) 理工学部の学生はまだ1年生のみであり、学年進行とともに受講するキャリア関連科目の効果を期待する。	工学部電気電子工学科の学生の回答などから学年進行とともに将来の希望が明確になってきており、専門科目の習得およびキャリア関連科目が一定の役割を担っていると考えられることから、現状の教育内容を維持する。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
理工学部・工学部	6	<p>理工学部電気電子システムコース 3-6 eポートフォリオシステムの利用について、昼夜合わせて利用率が68%と非常に高いが、内訳は教員の指示により使用しているのが67%、自発的に利用しているのが2%である。教員の指示による利用はSIH道場によるものと思われるが、授業限りになっていると推察される。2年生以上が大半を占める電気電子工学科での自発的利用者は3%程度であるので、普及させるにはをポートフォリオシステムを新たに取り入れる授業を増やす必要がある。</p> <p>工学部電気電子工学科 3-6 eポートフォリオシステムの利用について、自発的な利用が3%程度と低い。教員の指示での利用者はいるものの、システムを知らないという回答が20%程度あった。1年生でSIH道場を受講しているはずであるため、その後の定着が進んでいないことを示している。普及させるにはを教員主導でポートフォリオシステムを新たに取り入れる授業を増やす必要がある。</p>	(1) eポートフォリオの利用について、現状は教員の指示に大きく依存している。利用率向上にはeポートフォリオを利用する授業を増やすことが考えられるが、講義での利用方法、内容との整合性、システムの利便性等が教員、学生とも浸透していない。利用方法についてFD講演会などで情報を収集することが必要である。	教員へのeポートフォリオシステムの周知および導入のきっかけとなるSIH道場について、コーディネータ、授業担当者をなるべく多くの教員が分担することになるよう、輪番方法を検討中である。
	7	<p>理工学部電気電子システムコース／工学部電気電子工学科 3-10 授業の出席率について、出席率は比較的高めであるが、3-11で欠席理由として64%が朝寝坊を、次点として16%が他科目のレポート作成・試験勉強をあげており、他学科等でも同様の傾向が見られる。</p>	(1) 学生が計画的にレポート作成・試験勉強ができていれば大丈夫なはずだが、締め切りが集中しないような工夫、負荷の分散など、コース・学科全体で見た工夫をすると改善する可能性はある。	時間割編成にあたっては、可能であれば受講に無理のない編成を試みていく。学期末の試験についてはこれまでも実施科目が重なりすぎないような調整を実施しており、現状を維持する。レポート提出締切については、現状でも学期全体に分散し特に集中する時期は見受けられない。
	8	<p>理工学部電気電子システムコース／工学部電気電子工学科 3-22 授業以外の学修をしていないとしたのは理工学部47%・工学部44%、無回答も含めると理工学部50%・工学部47%であった。残り50%（理工学部）・53%（工学部）の学生は何らかの学修を実施しており、このうち理工学部63%（全体比では34%）・工学部72%（全体比では44%）が1時間以上を費やしている。内容は語学、資格関連、教養・社会問題等であり、自主的な学修がある程度根付いている。</p>	(1)	(特に対応計画・事項なし)

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
理工学部・工学部	9	理工学部電気電子システムコース／工学部電気電子工学科 4-4 S I H道場での学修について、S I H道場は48%（理工学部）・36%（工学部）が学修に役立っているとしている。このうち専門分野の体験学習、文章力、プレゼンテーション力、協働力に関して役に立ったと回答したのがそれぞれ、理工学部では25%から61%、工学部では14%から38%で、特にプレゼンテーション力については理工学部61%（全体比29%）・工学部38%（全体比13%）が役に立ったと回答している。理工学部電気電子システムコースが工学部電気電子工学科と比較して肯定的な回答が多いのは、受講後日が浅いことと、当該年度の授業内容が前年から改善されたものによると考えられる。	(1)	(特に対応計画・事項なし)
	10	理工学部電気電子システムコース／工学部電気電子工学科 10-1 eラーニングサービスの利用について、i-Collabo（理工学部71%・工学部68%）、Moodle（理工学部66%・工学部57%）、Mahara（理工学部62%）とも利用が進んでいるように見受けられるが、理工学部8%・工学部15%は利用したことがないと回答している。授業・実習の構成上、必ず利用しているはずであり、「eラーニング」という用語そのものについて十分認識されていない可能性がある。全ての学修についてeラーニングが適している訳ではないが、特定の分野では学修効果が見込めると期待でき、今後、活用について継続的に検討することが必要である。	(1)	eラーニングを授業全体に導入できる科目は現行ではないが、資料配布、課題提出にLMSを導入することができるものは少なからずあるため、引き続き導入促進を周知する。
	11	理工学部情報システムコース／工学部知能情報工学科 電算室の利用可能時間が少ない。	(1)	平成30年度より電算室をもう一部屋作成し、今の電算室で講義中でもコンピューターを使えるようにする予定である。  別の電算室用のコンピューターが2月に搬入され、4月から使用可能となる予定である。
工学部	1	工学部生物工学科 3-5学習内容の振り返りについて、10%程度の学生しか行っていないが、3-6の「eポートフォリオシステムの利用」において、約50%強の学生が使用したことがあると答えている。	(1)	学習内容の振り返りは、内容のより深い理解と今後の改善点に役立つことから、その実施を勧めていきたい。
			(2)	数名の教員が講義や演習にて「Mahara」を利用している。「Mahara」はアクティブラーニングの振り返りに最適なシステムであることから、今後も「Mahara」を利用した科目の増加を目指したい。  S I H道場において、学生と教員間の全てのやりとりを「Mahara」を用いて行っている。工学部生物工学科においても、振り返り作業同様に、ここ数年間で大半の学科教員が「Mahara」での作業を経験しており、さらに、今後各教員が講義や演習にて「Mahara」を使用することを勧めている。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
工学部	2 工学部生物工学科 3-3 1高校での未履修科目があることによる、大学で理解困難な科目の有無について、約60%もの学生が「ある（物理）」と回答していた。	(1)	教養教育で開講されている高大接続科目や自然科学入門の受講を推奨している。しかし、受講人数制限もあり、現状はオリエンテーション時に行われる基礎物理テストの30点以下が受講するようになっている。	生物工学科から改組された生物資源産業学部の新入生に対しても、オリエンテーション時に同様な対応を行っている。
		(2)	物理が苦手な学習に支障があると感じる学生には、LMS（リメディアル教材）の利用や高校に教科書・参考書の自学自習を促したい。	生物資源産業学部の新入生および生物工学科の学部生に対して、各オリエンテーション時に同様な対応を行う。また、物理系科目の講義時にもアナウンスする予定である。
	3 工学部生物工学科 8-1 英語の学習時間について、毎日及び定期的に学習している割合が比較的高いがそれでも約30%であり、残りはほとんどしていない状況である。	(1)	英語の自主学習を促し、テレビ・ラジオの英語教育番組の日々の視聴や、大学HP上のeラーニング（スーパー英語）システムの受講を勧める。	生物工学科の学部生に対する学期始めのオリエンテーション時や専門課程における英語科目（化学英語基礎、専門外国語）の講義時にアナウンスを行う予定である。
	4 工学部生物工学科 10-1 eラーニングサービスの利用について、利用した学生が約80%もあり、10-8「オンライン学習科目への要望」では、約40%弱の学生がオンライン学習科目を増やした方がよいと考えている。	(1)	学生及び教員共に積極的なeラーニングサービスの利用を促す。教員は講義のeラーニング化、学生はMaharaやスーパー英語等を積極的に利用する。	夜間主コースの必修科目（国際コミュニケーション英語）では、スーパー英語を導入している。
		(2)	学生はeラーニングによる学修効果は高いと感じているので、提供可能なオンライン学修科目を増やしていく。	生物工学科の講義科目のうち、eラーニングサービス利用できる専門科目の積極利用を促している。
	5 工学部光応用工学科 3-1「自分の専門分野について興味関心を持ち、意欲的に取り組んでいる」という設問に対して、「全くそう思う」「そう思う」の学生の比率が5割以下で、他学科と比べると低い。	(1)	学科内での専門分野が、物理、化学、電気電子、情報と多岐にわたるので、自分の専門分野が絞り込めていないことが考えられる。	研究室選択時に広い視野からの判断ができるように、3年次までは様々な方面に興味を広げるように指導している。 例：物理系の科目（幾何光学、波動光学、レーザ工学など）、 化学系の科目（基礎光化学、応用光化学、分子工学など）、 電気電子系の科目（電気回路、電気磁気学、電子回路など）、 情報系の科目（コンピュータ入門、システム解析など）を必修科目とすることで、多様な分野に興味をもたせるようにしている。等
		(2)	研究室の配属が決まると、自ずと自分の専門分野が絞り込めるので、興味を持って取り組めるのではないかと。	研究室配属後は、自分の専門分野に興味を持って取り組むことができおり、結果として大学院進学希望者の数も高い水準となっている。
6 工学部光応用工学科 3-19 授業のノート・資料の取扱いについて、授業のノート・資料が整理できていない。	(1)	ノートは取っているが、それと資料を関連づけた整理ができていないので、資料配布時に適宜指導が必要である。	配布資料をノートに貼り付けさせるなど、ノートと資料を関連づけた整理ができるような指導を心掛けた。	

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
理工学部	1	理工学部機械科学コース 4-4 SIH道場が大学における学修に役に立っているかについて、SIH道場の趣旨が学生には十分に伝わっておらず、来年度以降はさらに丁寧に詳しくSIH道場の意義・趣旨を説明する必要がある。また、機械科学コースで行っているディベートは、議論能力(分析力・判断力に基づいて論理構成し主張するあるいは意志決定をする能力)を向上させることにある。その効果は即効性があるものではなく、継続的にディベートの経験を積むことで能力が向上する。	(1) 機械科学コースでは、グループで議論する機会のある実験・演習等があり、研究室配属後や社会人になった時にディベートの意義、有効性を実感して貰えるものと考えている。来年度はSIH道場担当者と相談の上でより詳しい趣旨の説明を行う。	来年度のSIH道場担当者を決定し、機械科学コースで行っているSIH道場に関して学生が学修に役に立っているとは必ずしも思っていないことについて、情報を共有した。対応として、初年次より受講するSTEM科目の意義を担当者から学生により詳しく説明することとした。
	2	理工学部情報光システムコース 3-1「自分の専門分野について興味関心を持ち、意欲的に取り組んでいる」という設問に対して、昼間コースでは8割近く、夜間主コースでも6割以上の学生が「全くそう思う」あるいは「そう思う」と回答しており、理工学部の他コースと比較しても、高い水準になっている。	(1) 最新の業界の動向や最新の研究について講義で紹介する等の興味関心を持続できるような工夫をする。	情報光システムセミナーでの研究室見学等を通じて、最新の研究についての興味関心を喚起するようにした。
	3	理工学部情報光システムコース 3-6 eポートフォリオシステムの利用について、eポートフォリオシステム(Mahara)がほとんど利用されていない。	(1) 授業での利用を検討する。なお、平成29年度は、SIH道場でレポート提出のために利用した。	情報光システムセミナーの情報系で利用した。
	4	理工学部情報光システムコース 3-8 予習・復習の時間について、特に昼間コースで、予習・復習の時間が理工学部の他コースと比べて短く、8割以上の学生が1日1時間程度かそれより短いと回答した。	(1) 予習・復習の習慣をつけるために、教員から課題・宿題を出す等、学修時間を確保する施策を検討する。	授業で小テストなどを実施することで、予習、復習をするような方向付けを行っている。
	5	理工学部情報光システムコース 3-14~15 成績評価分布について、昼間コースでは、成績評価分布が学修意欲の向上に役立っていると答えた学生や、GPAを確認している学生の割合が、理工学部の他のコースと比べると高くなっている。	(1) 成績分布やGPAが、1年終了時の系配属の結果に関係するため、それを意識した結果と思われる。系の配属後も、成績分布における自身の位置づけやGPAを意識して、学修計画の改善を促すような意識付けが必要である。	平成30年度入学生から、入学時点で系に所属するため、1年終了時にコース配属によりコース・系をあらためて確定するが、これまでのように成績によっては希望の系に配属されるというインセンティブがない状況でも同じような意識づけができるよう模索している。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等	
理工学部	6 理工学部応用理数コース 4-4 S I H道場での学びが大学における学修に役に立っているかについて、どちらともいえない、との回答が多く見られた。	(1) SIH道場での取り組みは新生入生に対する学修の動機付けが一番の目的であったために、直接的に学修にかかわる取り組みが弱い面があり、また1年生であるため専門科目の学修の経験が少ないといった状況であった。専門科目への取り組みに役立つであろう資料収集法等について、さらに取り入れていく。	次年度SIH道場の授業設計に反映させることが必要であり、次年度課題として対応を検討する。
		(2) 大学動画サイトを使った事前学習の方法を現状より一層使いやすく、またわかりやすいものにする必要がある。	大学教育再生加速プログラム実施専門委員会に対応を要請する。
	7 理工学部応用理数コース 3-3 1高校で未履修科目があることによる、大学で理解困難な科目の有無について、高校で未履修科目があるため、数理科学及び自然科学を目指すにもかかわらず、数学、物理、化学に対して困難を感じている割合が高い。	(1) 全くの未履修者には、入学時の確認テストの結果等も踏まえて、eラーニングや高大接続科目の履修を一層促す。高校の新課程ではこれまで扱っていた内容（例えば、行列）が扱われなくなったりしているため、そうした内容についても、eラーニング等での自習を促すなどする。	入学前学習科目の見直しなどを行い、次年度入学予定者の入学前学習で課す科目選択などに柔軟性を持たせた。
8 理工学部応用理数コース 3-2 8カリキュラムマップについて、知らない、または見たことがないという学生が2/3以上いる。	(1) 入学時のガイダンスの時に、カリキュラムマップの見方等を今以上に詳しく説明し、履修時の指標になるように指導していく。	後期授業の履修登録期間に合わせ教務ガイダンスを行い、カリキュラムマップについて再度説明を行った。	
産生物学資源	1 教員の指示に従って、ポートフォリオの利用率が高い。	(1) 今後も引き続き1年生から利用を指示する。	本年度もSIH道場で「Mahara」の使用法の説明を行い、ラーニングポートフォリオの利用を指導した。
	2 問57 本調査時に、生物資源産業学部の学生は1年生のみであるため、専門科目は少ないが、多くの学生が難易度は適切と答えている。一方、より高度な内容を求める学生や易しくすることを希望する学生も少なからずいる。	(2) 入試方法と入学後の学力に関する追跡調査により、専門教育の在り方を継続的に検討する。	本年度も「生物資源産業学部追跡調査ワーキング」を開催し、入試方法と入学後の学力に関する追跡調査から、専門教育の在り方を検討した。現在は1年生と2年生のみの調査データであるため、引き続き継続的に検討予定である。
教養教育院	1 問40の「高校での未履修科目があるため、大学で理解が困難な科目」については物理が最多で15%となっている。生物資源産業学部が最多で、医学部保健学科検査技術専攻、歯学部歯学科、薬学部、工学部生物工学科も多い。	(1) 教養教育の基礎科目との連続性、あるいは専門科目への橋渡しとして自然科学入門 物理学を開講している。学部によって履修指導の方法が異なり、必修として扱う学科から、自己判断に任せている学科まで様々である。専門として必要ということであれば、必修として履修指導するように卒業要件に組み入れたり、履修するための時間的配慮などを、今後、学部と調整していきたいと考えている。	・理科3科目（物理・化学・生物）をmanabaに掲載し、未履修者や学修に不安を持つ者が自主学習できるように計画中である。 ・自然科学入門「化学」を、主として医学科が受講するクラスと生物資源産業学部が受講するクラスに分け、それぞれの学部の専門性に合わせて内容を変更する計画である。
		(2) 必要に応じて、教養教育院と学部および授業担当者の協議（あるいはFD）により、授業内容と難易度の調整を図りたいと考えている。	・高大接続情報交換会を開催し、学部と教養教育院の間で情報共有・連携を図る予定である。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
教養教育院	2	問4 8及び問5 5「外国語教育科目」では、「授業内容の水準は適切である」と答えた学生が多い。	(1) 現在でもそうであるが、授業担当者は、受講生の学部学科を考慮し、英語力のレベル並びに専門学部学科での専門性を考えながら使用するテキストを選び、受講生のレベルや所属の学部学科を意識して授業内容を工夫している。シラバス内容や授業初回時の説明などをさらに検討し改善していきたい。  (2) 教養教育の英語と、学部学科の専門を考えた授業内容について、学部学科との連携を深めていくことを考えている。	・英語領域担当者会議で情報交換を行い、授業内容等の検討を重ねている。
	3	問6 5、6 6「英語学修の時間」及び「学修方法」で定期的に自学している学生は少ない。	(1) スーパー英語などの自主学習の教材が用意されているので、より周知を図り学生の自主学習に対してさらなる環境の整備を行いたい。また、国際交流会館2階のELCSのプログラムも今後更に充実させ、意欲的な学生を受け入れていきたい。蔵本地区にも同様の環境作りを進める。	・スーパー英語はバージョンアップを予定しており、スマホ、タブレット等に対応することになり学習環境の改善が期待できる。 ・附属図書館蔵本分館でELCSプログラムを開始しており、常三島地区・蔵本地区の両方で実施体制が整った。今後、更にプログラムを充実していく予定である。
その他	1	問4 3「教養教育の科目選択の基準」では、「好きな科目・面白そうな科目」、「単位をとりやすい授業」が多い。また、問4 4の「科目選択の情報源」として「シラバス」、「先輩からの助言や情報」が多い。	(1) 徳島大学教育について考え提案する学生・教職員専門委員会において、新たな情報源として「動画による担当教員からのメッセージ」、「後輩に伝えたいこの授業の魅力」などを整備することが提案された。今後、この実現が可能かどうかを各部局で検討する予定である。	教育について考え提案する学生・教職員専門委員会の下に「授業デザイン発信ワーキンググループ」が設置され、学生からAttractive（魅力的）であると評価されている授業の動画を上映し、授業や教育の方法について議論する学生参画型FD（AttracTube）が開催された。
	2	問8 4「授業評価アンケートの授業改善への活用」について、活用されていると感じている学生の割合が少ない。	(1) 徳島大学教育について考え提案する学生・教職員専門委員会において、アンケート結果のフィードバックの方法および活用方法について検討中である。この中では、受講した授業についての結果の公開なども提案されており、個々の授業ごとの授業改善にとどまらず、組織的な授業改善についての方法を今後検討していく必要があると考えている。	